

— 登山家の遭難・単独登攀の加藤文太郎 (2の2) —

(記 岡本)

文太郎の人物像を更に少し掘り下げてみることは、遭難死理解の一助に繋がる面があると思う。新田次郎著の小説「孤高の人」が文太郎の狷介孤高の単独行者像の上に謙虚、堅実、質素というプラスイメージを加えすぎたきらいがあり、それが故に吝嗇な男のように誤解されている面があるかも知れない。文太郎をよく知る人物の会社の上司である遠藤豊三郎、文太郎が出入りしていた好日山荘神戸店の主人島田真之助の話に典拠すれば別の文太郎が見えて来る。



会社では「黙って無愛想で薄汚れたナツパ服に腕撫でており、ある意味で異彩を放った存在だった」「あらゆる抹消的な娯楽趣味は関係を絶って振り向かず、交際上行われる会社の課内の宴会などにも決して出なかった」「変人と言われる程に誰にもボツ然と無愛想だった」。しかし、「山友達とは誘われればどこへでも遊びにいくし、酒も少しやるし、麻雀もやる。カフェへも社会見学といって時々仲間ともいっていた」「社会人としての一步一步がその行動に顕現されるようになったのは、結婚生活に入った直後から始まった。課内でも大きな声で通りすがりに『お早よう、お早よう』といって頭を下げるようになった。その態度の変わりようは吾々には好奇心を起こさせる程だった」。夫人花子さんも「一見無愛想のようでしたが、細かいところによく気が付き親切でした」「山の歌を一緒に歌ったりして家庭での彼は実に朗らかでした」「登志子が泣けばあやしながら食事をしたりする子煩悩でした」という。山と仕事の世界を優先し、截然として他を切り離していたようである。節約家であったことは確かであるが、その理由は追って説明する。

文太郎と吉田の遭難死を巡っては色々な想念が湧いてくる。

- (1) 2人の登山技術からみて何故遭難したのか納得のいかない面がある。遭難死の直接の原因はどこにあるのか。
- (2) 積雪期でも単独行をしてきた文太郎が何故吉田とパートナーを組んだのか。どちらからパートナーを持ちかけたのか。パートナーを組んだことが遭難原因の一部になっていないか。
- (3) 2人が遭難しても同時に息を引き取ることはなかつただろう。吉田の傍に文太郎のピッケルが刺してあったことから、文太郎が吉田の死を看取ったと考えられようが、看取った後文太郎はどんな行動を取ったのであろうか。

(1)に関連して=藤木九三は文太郎が槍北鎌尾根で行方不明になったと聞かされて、文太郎の力量手腕、冬山の非凡な経験を知っているが故に、また下山予定日に遅れて下山した例があったが故に、当初「まさか」「2、3日もすれば、どこからかひょっこり顔を出すだろう」ぐらいに考えたという。また藤木は直接の遭難原因について「当時天候が定まらないのを知りながら、吹雪を衝いてあえてでかけたということ、殊に平生あれほど用心深い、かつ用意周到を期する加藤君が殆ど食糧らしいものを携行せずに出かけという事実」を挙げている。

本多勝一はヤマケイ文庫の著書の中で、「冬山には100%安全な方法があるのか、100%安全かどうか検討していたら登山などできない」という。「冬山の一步一步を「安全度の高い確率」にかけているが、残りのパーセントは小さな「危険の確率」に属し、いつかは小さな確率に引っかかるも

のだ」ともいう。国際的にも大ベテランが「つまらぬ遭難で命を落とすことは珍しくない」（注1）し、功なり名をとげた大登山家が遭難死しなかったのは、途中で第一線を退いたにすぎないとしている。

「勇気、沈着、用意周到」な文太郎が食料用意、天候予想、滑落などの判断ミスで遭難したのだが、何故にいくつものミスを犯してしまったのか、魔がさしたとでもいうか、その理由はわからない。

(2)に関連して=文太郎の単独行についての考えを見てみたい。「登山が自然との闘争で征服するものとするなら、他人の助力を受けない単独行こそ、最も闘争的で征服後の慰安においても最も強い」と記しており、別の項では「岩登りもスキーも下手なのでパーティーの一員として喜ばれず、やむなく一人で行くのであって、別にイデオロギーに立脚して単独登攀を好んでいる訳ではない」とも記している。両方とも文太郎の本音であろう。

冬のアルプスを単独行してきた文太郎が何故にパートナーを組んで難関の槍北鎌尾根を極めようとしたのか。藤木九三は具体的な時期に言及していないが、最近いきりに同行者を求めて山に入るというある種の変化が萌していたとし、技術的に困難な岩場とか氷雪を鎧ったロックピークの登降のためにはクライミングパーティーが必要であると文太郎が認識していたとするなら、一躍進を暗示するものと登山スタイルを分析している。神戸の好日山荘の主人、島田真之助によれば、将来のヒマラヤ遠征隊に関連して、文太郎は社会人から遠征隊を出す場合、その隊員になる為には二つの条件即ち技術と遠征資金の自己負担を具備しなければならないと言っていた由である。また島田は文太郎の技術を評して、「正直なところ、彼の技術は決してうまいとは言えない。むしろあの技術でよくあれだけ大胆不敵な行動ができるものだ…と思うくらい」「スキー技術も巧い部類に入らないと思う」と述べている。両者の話から、文太郎は将来のエベレスト遠征隊参加に備えて、遠征資金の貯金とエベレスト登攀の技術(ロックピーク登降の技術とクライミングパーティー馴致)に舵を切り始めていたことが大いに想像される。

文太郎の登山歴を見ると、昭和9年(1934年)4月に吉田とパーティーを組み、前穂、奥穂など8日間の積雪期登山をした。その際、文太郎が極めたいとしていた槍北鎌尾根と前穂北尾根の内、前穂北尾根を達成している。この時の登山では、文太郎がブレーキになったので第3峰の左のチムニーに露營したことがあり、吉田は手に1ヶ月入院の凍傷を追っている。文太郎は翌昭和10年の年末から11年正月にかけての槍北鎌尾根を計画した際、「一人では少々不安だ」としても山に何らの興味を持たない案内人を連れて行くことはできないとし、山に熱情を持ち岩登りの実にくまなく吉田君を誘惑してしまったと記している。これから見ると、文太郎から吉田を北鎌尾根行きを誘ったことや技術面でも吉田が劣っていなかったことが推定される。むしろ文太郎が吉田より下手だった蓋然性もあったろう。藤木九三もパートナーがいたことについて、「吉田が手足纏いになったろうとか、又は危難の原因がこの一事にかかわる、といったことは毛頭意味しない」と述べている。

小説「孤高の人」では、失恋の地獄から脱する踏ん切りとして槍北鎌尾根を登ることにした宮村(吉田)から執拗に同行を求められて文太郎が渋々応じたことになっており、文太郎を被害者の立場に置いている。

(3)に関連して=小説「孤高の人」では、宮村(吉田)の死を看取った後、文太郎は生き延びようとその場を離れ天井沢を下に降ったが、果たせず約200m先で息絶えたとしている。そうではなく、岳友に殉じたとする方に組みしたい。

当時の岳人がパートナーと遭難した際にとった行動(倫理観)の例を参考にしたい。登山家の芳野満彦(注2)が昭和23年12月、17才の時に友人と二人で八ヶ岳で遭難した(同伴の友人は死亡し、

芳野は救助されるが、両足の指を失う)。友人が凍傷、疲労で動けなくなった時「私は何度か一人で下山しようかと思ったが、見捨てて一人で下山する勇気はなかった。また、彼と死を共にするのが山男の道徳ではないかと思った」と記している。発狂状態のうちに息をひきとった友人の死屍を「雪のないハイ松の所まで運び、オーバーの上から毛布を掛けた…そして赤岳の石室に四つん這いで進んだ。…眠れば死んでしまうと思い眼を静かに閉じた。…何事も考えずに手を胸に当ててじっと眼を閉じた。そして死を待った」。戦後間もない昭和23年、17才の青年にして「山男の道徳」は岳友に殉じるべしとの観念を持っていた。明治38年生で名だたる登山家、大企業の技師であることや上述の人間像などを考慮すれば、パートナーが先に息を引き取ったとは言え、天井沢を下って湯俣山荘まで降ろうとしたであろうか。では、吉田の死屍の傍でなく何故に約200m離れたところで文太郎の死屍が見つかったのかについては、考えが纏まらない。



人類初のエベレスト無酸素登頂(1978年)の記録を持つラインホルト・メスナーは、1980年にインタビューに答えて「8000mを超える高山で百年前から謳われているような『登山仲間』はありえない。例えば、ひとりが死に瀕している時、他の者はあと5分ここにとどまれば自分も命を落とすことを頭ではなく全身全霊ではっきりわかっている。そんな状況で弱った者を助けたり、降るのをまっていられるはずがない。英雄的な精神もそこでは何の意味もなさない」と瀕死の登山仲間を置いて下山しても道徳上許されるというのがごとき見解を述べている。

文太郎は生涯の目標としてただろうヒマラヤ遠征のための技術鍛錬の途中で遭難死したのだと思う。文太郎はメスナーが言及したと同じような行動は到底取り得なかつたであろうと思う。

(了)

(注1) 例えば、初の8000m級処女峰としてアンナプルナ(8091m)を初登頂したルイラシュナは、アルプスでスキー中クレバスに落ちて落命

(注2) 芳野満彦 昭和6年(1931年)生、八ヶ岳遭難後も山を続け、昭和40年に日本人初のマッターホルン北壁を登攀、新田次郎著「栄光の岸壁」のモデル、享年80才

[参考資料] (前月号掲載の参考資料の他に)

「日本人の冒険と『創造的な登山』」= 本多勝一著 ヤマケイ文庫(2012年刊)

「極限への挑戦者」= ラインホルト・メスナー著 スラニー京子訳 東京新聞((2013年刊)

「新編山靴の音」= 芳野満彦著 中公文庫(1981年刊)